

たまのよこやま



発行

財団法人東京生涯学習文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033
多摩市落合1-14-2
☎ 042-373-5296

東京都埋蔵文化財センター報 No. 49

平成12年6月30日

<http://www.tef.or.jp/maibun/>



多摩ニュータウン遺跡群の縄文土器

東京都埋蔵文化財センター創立20周年



2000年 常設展示 多摩の遺跡と遺物

むかし人の風景

—多摩丘陵の歴史—

▲ 発掘された日本列島 2000 [地域展]

▲ 2000年常設展示 ▲

創立二十周年にあたって

財団法人東京生涯学習文化財団
理事長 市川 芳正

東京都埋蔵文化財センターは、昭和55年7月に財団法人として設立され、(財)東京都教育振興財団、さらに(財)都民カレッジとの統合を経て、このたび、満20周年を迎えました。

この間、数々の発掘調査を遂行し、考古学の進展に少なからず貢献できたと考えております。特に、前身の遺跡調査会時代を含めると35年にわたって続けてきた多摩ニュータウン遺跡群の調査は、丘陵全体を隈なく調べた世界でも希有な例です。千箇所近くに及ぶ遺跡調査により約5万年前の石器をはじめ、大昔から丘陵で暮らしてきた人々の生活の様子を解き明かす膨大な情報が得られました。

平成3年度からは、調査対象地域を都内全域に広げ、市ヶ谷や汐留における江戸時代の大名屋敷跡の調査等々により、学術上も貴重な成果をあげております。

近年は、全国でも発掘調査が進み、歴史教科書を書き換えなければならぬ大発見も続きました。その成果の一端は、7月20日まで江戸東京博物館で開催されている「発掘された日本列島2000—新発見考古速報展」でも紹介されているところです。

20周年の節目にあたり、厳しさを増す財政環境にあります。一層の効率的運営に努めるとともに、設立の原点に立ち返り、先人の残した貴重な文化遺産を次代に引き継いでいく重要な責任を果たしていきたいと決意を新たにしております。

遺跡だより ⑤7



瀬戸岡分室では平成10年5月から平成11年3月にかけて、あきる野市内の天神前遺跡・上賀多遺跡・瀬戸岡30号墳・新道通遺跡の調査を行いました。縄文時代から近世以降までの遺構と遺物が検出されましたが、中心となる時期は古墳時代後期で、住居跡は天神前遺跡から6軒、新道通遺跡から19軒が検出されました。平成6・7年度に調査された隣接する三吉野遺跡群からは36軒の住居跡が調査されていますのでこれを合わせると61軒になり、未調査部分を含めるとかなり大規模な集落だったことが想定されます。

今回はこの中の新道通遺跡について紹介したいと思います。新道通遺跡は平井川の右岸に位置していて、表土を50cmも掘り下げるとすぐ河原

石が露出してくるため、当初はこんな場所に住居跡が検出されるなどは予想が付きませんでした。ところが掘り下げたところから、土師器片などが顔を出しはじめ、その出土する範囲が方形になり、土層をよく観察すると遺物が出る範囲の土は若干柔らかく、色調もやや暗いことが分かり、最終的には調査した全面が住居跡だらけという状態になりました。

住居跡19軒の平均的な大きさは、およそ縦5.4m、横5.2mで、形は正方形に近く、カマドと貯蔵穴、4本の柱穴、壁溝が検出されています。カマドの構築は北側部分に多く、西側がこれに続き、1軒のみが東側に構築されています。カマドは使用回数が少ないのか、後世に水を受けたためかは分かりませんが内壁等はいずれも焼けていませんでした。袖は真土を主体とした土で構築されており、炊き口部分にはほとんどの住居跡で大型の自然礫が使用されていました。

4本の柱穴は比較的浅いものでしたが、礫層を掘り抜いて構築されていました。住居跡内の遺物の出土状態は概ねレンズ状の自然堆積と思われる状況であり、上部には5cm程度の小破片が多く、掘り下げることによって大きさを増し、床面には完形



4号住居跡 遺物出土状態

に近い土器が数多く出土しました。住居跡から出土した遺物は、土師器が中心で、他に須恵器、土製品、鉄製品、石器、礫が出土しています。土師器は坏、碗、鉢、甕、甌など、須恵器は坏、蓋、長頸壺などの器種がありました。土製品には玉や紡錘車、性格不明の棒状や環状の製品、支脚などがあり、鉄製品では鎌や釘が出土しています。石器には砥石・磨石・台石・編物石などがあり、砥石は使用痕から金属製品の刃研ぎなどに使用したものと思われます。編物石は簡便な編物を行なうための石

錘として使用されたものと考えられる礫で、8個程度の礫を1セットとしていたことが想定されます。

新道通遺跡の住居跡は概ね6世紀末から7世紀初頭の時期に営まれたものが多く、集落内では比較的古い時期の住居跡が多いことが判明してきました。これらの人々はどういう経緯でここで生活を営むようになったのでしょうか。

川のそばは飲料水の確保や各種入排水には便利だったと思われませんが、すぐ下が河原石という状態ですから農地には不向きと思われ、雨期には川が氾濫する可能性も高かったと思われれます。

前述した三吉野遺跡群の調査では、「牧」の可能性を示す遺構と遺物が検出されましたが、今回の調査ではそれを直接的に補強する資料には恵まれませんでした。

今後の課題として、遺構・遺物に反映された技術的側面からみた同時期の集落との比較や牧の開始時期に関する検討、当集落の成立に関わる社会的背景の解明などがあげられます。これらの解明には、地道な資料の積み上げが不可欠と思われます。瀬戸岡分室では現在、報告書刊行のための整理作業が行われています。

(金持健司)

文化財講座 <39>
大江戸掘りもの帖 ~十六~

汐留遺跡の石製品

江戸時代の汐留遺跡の特徴をまとめると、武家地であること。低地に立地すること。消費地であることの三点に集約できます。汐留遺跡から出土した石製品には、硯・温石・砥石・印鑑・箱庭道具・植木鉢・軽石・石筆・墓石・鋳型などがあります。これらの中には居住者である武士の

嗜みを反映しているものがあります。硯(書)・印鑑(書絵)・箱庭道具(盆景)・植木鉢(盆栽)・茶臼(茶)などです。

低地に立地する遺跡の利点は、台地上では消失してしまう木製品や漆製品が豊富に残ることです。石製品の中にも赤漆を塗った硯や

砥石が出土しています。石製品の大部分は、商品として特定の生産地で作られました。国元や江戸市中で購入された後は、屋敷内に持ち込まれ、使われ、そして捨てられました。例えば、砥石には擦り減りすぎて薄くなり折れたもの、硯には墨をする部分が抜けたものがあります。

石製品はその種類により形・大き

さ・石材に共通性が見られます。規格化されているのです。例えば温石という懐中行火(あなか)は、手のひらサイズの石板の一端に穴の開いている製品ですが、全く異なる3種類の石質があります。結晶片岩と砂質凝灰岩と滑石です。それぞれ大きさが異なります。石質の差は生産地の違いを意味します。各々の産地で石質の特性に応じて規格を制定したのでしょう。規格を統一することは、商品が既製品(レディーメイド)だからです。

石製品というよりも石造物と言った方が良いものに石灯籠があります。庭園に置かれるもので、その購入は造園の際に発注するのでしょうか。注

文品(オーダーメイド)です。商品として完成品が購入されることの多い石製品にあって、材料を購入し自分で削り上げる製品があります。印鑑です。これには滑石という

軟質の石材が使われ、印材に文字を刻んだり飾りを彫るもので、手作品(ハンドメイド)の典型です。印鑑を作る方法にはもう一つあります。

硯を原材とする転用です。その作り方は、硯そのものに刻字し切り取るか、印鑑の大きさに切断した断片に刻字するものです。これもハンドメイドです。石製品の転用の例には墓

石もあります。江戸時代の汐留に墓地はありません。それにも関わらず墓石が出土したのは訳があります。それは明治時代の建物の基礎に使われていたのです。つまり、どこかの墓地に建っていた墓石が、何かの拍子に石材として汐留に持ち込まれ、建築材に使われたのです。明治初頭は建築ラッシュで官庁間で石材を奪

保存科学室(ぼれ話) (十三)

出土遺物にみられる

黒色物質について(3)

今回は、土器作り教室で製作した縄文土器で煮炊きをした時にできる黒色物質を紹介します。

肉類や野菜類を煮炊きしますと、丁度煮汁が土器表面ににじみでる付近が黒漆を塗ったように黒光りすることがわかりました(写真)。

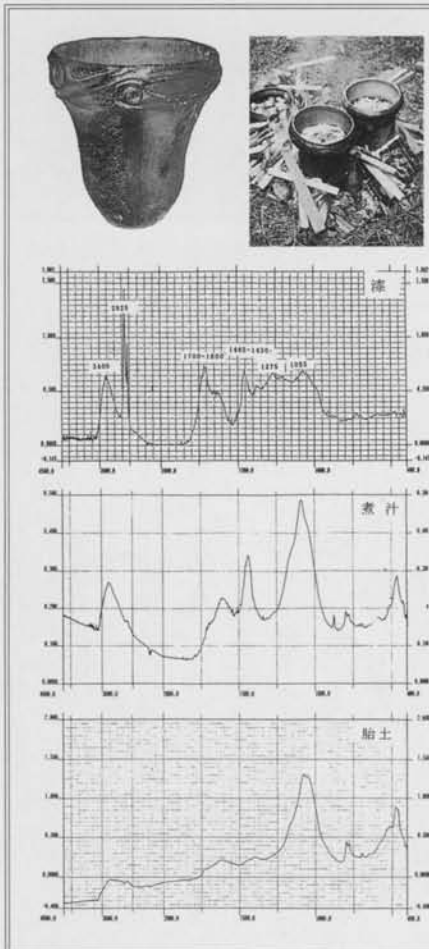
い合ったことが記録に残っています。墓石の下の仏様はどうしたのでしょうか。

石製品の中で唯一屋敷での生産を示す遺物に鋳型があります。製品は鉛製の網の錘で、鋳型は複数出土しています。鋳型とは合いませんが、製品そのものも出土しています。

(小島正裕)

以前、土器表面が黒光りしている土器破片が、黒漆か否かということが多数持ち込まれたことがあります。が、実体顕微鏡やFT-IR法で分析しても土器胎土に似た測定波形しか得られませんでした。

しかし、土器の煮炊きによる実験から、この黒色物質は、黒漆ではなく、煮汁が土器表面にしみ出た場所で高温の炎により黒色化したことが明らかになりました。(門倉武夫)



発掘された日本列島2000
新発見考古速報展 開催

今年度も江戸東京博物館において、7月20日まで開催中です。

当センターにおいても、地域展示として、多摩ニュータウン地域内から出土した縄文土器52点等を出品しており、「実物にふれよう！」コーナーも設け、好評を博しています。



地域展見学会

科学研究費補助金の交付

当センターの次の職員に内定通知がありました。

佐藤 攻（調査研究部長）「埋蔵文化財行政の歴史的経緯の解明」

各種行事

今年度も、各種行事がスタートしました。

縄文土器の野焼き

5月3日（祝日） 見学者117名

親子ふれあいキャンペーン

6月10日（土）参加者23組65名

映画観賞会

6月24日（土）

参加者99名

今後の予定 今年度の講演会は「むかし人の風景」という展示テーマに沿った企画でおおくりします。

なお、このほか埋蔵文化財センター創立二十周年を記念した行事も計画しております。

平成12年度広報普及事業のご案内

日時	行事名	内容
5/3(水) 10:00~14:00	縄文土器の野焼き 雑穀の種まき	縄文土器の焼成作業の実演（見学自由） 庭園内の畑地にアワ・キビ・ソバ等を作付け
6/10(土) 13:30~16:00	とうきょう親子ふれあいキャンペーン	火おこし体験と遺跡庭園「縄文の村」の探索 小学生と保護者対象（応募者多数の場合は抽選）
6/24(土) 13:30~16:00	映画会	「稲荷塚古墳」「祖谷のかずら橋」
7/8(土) 13:30~16:00	第1回講演会	演題「石器が語る東日本の人々」 講師 阿部祥人（慶応義塾大学教授）
8/17(木) 9:30~16:30 8/18(金) 9:30~16:30 9/9(土) 9:30~16:30	縄文土器作り教室	詳細は「広報東京都」等に掲載の予定 応募者多数の場合は抽選
9/13(水) 13:30~16:00	第2回講演会	演題「土偶からみた縄文集団」 講師 安孫子昭二（都文化課学芸員）
10/7(土) 13:30~16:00	第3回講演会	演題「おしゃれな縄文人」 講師 降旗千賀子（目黒区美術館学芸員）
10/8(日) 11:30~15:30	汐留遺跡現地説明会	当日、現地（港区東新橋）汐留分室で受付 江戸時代仙台藩伊達家屋敷の船入り場遺構
10/28(土) 13:30~16:00	とうきょう親子ふれあいキャンペーン	火おこし体験と遺跡庭園「縄文の村」の探索 小学生と保護者対象（応募者多数の場合は抽選）
11/11(土) 13:30~16:00	第4回講演会	演題「古代朱の風景」 講師 市毛 勲（早稲田実業高校教諭）
1/17(水) 13:30~16:00	第5回講演会	演題「古代のニュータウン開発」 講師 栗城譲一（当センター調査研究員）
2/7(水) 13:30~16:00	第6回講演会	演題「江戸・東京・人」 講師 斎藤 進（当センター主任調査研究員）

分室の開設

4月以降、新規の分室です。

大塚分室 甲崎光彦係長、並木仁、

江里口省三、内野正、伊藤健、

田中純男、武井利道

栄町分室 千葉基次係長、長佐古

真也、栗城譲一

市ヶ谷北分室 甲崎光彦係長、竹

尾進、飯塚武司

草花現地事務所 千葉基次係長、

今井恵昭、金持健司

人のうごき

4月の定期異動で

坂本直洋（経理係長）、斎藤勝則（施設係長）、雪田隆子（調査研究部係長）、安孫子昭二（調査研究部係長）、が転出し、竹元隆豊（都嘱託員）が退職しました。

後任に、次の者が着任しました。

原田博明（経理係長）、坂井則弘

（施設係長）、野崎英夫（都嘱託員）。

また、4月1日付けで、調査研究部係長に原川雄二が就任しました。

R100

古紙100%配合の再生紙
を使用しています。